

第3回(2012. 5.15 配信)

篠井純四郎の日本史講座－「間違えやすい日本の古い時代の話」

縄文土器と弥生土器

「縄文土器」とは日本人が最初に使うようになった土器ですが、縄をころがしてつけたような文様があることから縄文土器と名付けられたとか、「弥生土器」とは縄文土器の次に出現した土器で、焼き加減も縄文土器に比べて高温で焼いたものであるということなどはよく知られていますが、この名前のくわしい由来などについて知っている人は少ないようです。ちょっとおさらいしてみましょう。

明治10年(1877)、アメリカのマサチューセッツ州ピポティ科学アカデミーのエドワード・S・モースは、明治政府から招かれて、東京大学で動物学を教えていましたが、大森付近で線路工事の為に露出していた貝の層(大森貝塚)を車窓から発見し、土器や石器を発掘したのが始まりで、この時発見した土器が縄を転がしたような文様があったので、モースは報告書に「縄文土器」と書いたのが始まりです。

この頃の土器はみんな縄目模様が描かれていると思いがちですが、発見される縄文土器は無紋もしくは単調な線模様が多いのです。縄文文様が付いている方が見栄えも良いし、また「縄文土器」という名称がついているものですから、博物館等でも展示スペースなどの関係もあってでしょうが、縄目模様のある土器が陳列されることの方が多いからなのでしょう。

縄文土器を使っていた時代は1万年以上前から紀元前3世紀頃までとされていますが、その始まりが年々遡っています。最近、青森県から発掘された土器は、およそ1万5千年前のものと言われていますが、年代の特定が正しければ、世界最古の土器の仲間に入るとして注目されています。

土器は煮炊きする道具として発明開発されたと思われていますが、それぞれの用途から多種多様な土器が発見されています。縄文時代は1万年以上に亘っていますから、土器の特徴から草創期、早期、前期、中期、後期、晩期に区分されて、各地でそれぞれの時期に当てはまる代表的な土器の形式を決めています。

縄文中期(紀元前3000～紀元前2000)には様々な土器が出現し、形も大きくなり紋様も派手になってきますが、この時期の代表的な土器が「火焰型土器」と呼ばれる、まさに土器が燃えているような形をしたもので、特に信越地方に多い土器です。信濃川流域の笹山遺跡から出土した火焰型土器は日本最古の国宝に指定されていますし、火焰型土器は長野市で行われた冬季オリンピックの聖火台のモデルとなったことなど有名です。

明治17年(1884)東京の本郷弥生町の向ヶ岡貝塚で一個の壺型土器が発見されました。縄文土器と違って薄くて硬く、文様もなく赤茶けた色をしていたので、蒔田鎗次郎という人によって、土地の名前から「弥生土器」と命名されました。弥生土器は縄文土器に比べて文様も無く非常に質素なもので、特に目立った特徴はありませんが、製造技術が進歩したため、薄手で大きなものも製作できるようになりました。その最たるものが甕棺と呼ばれる棺で、大きな甕に死体を入れて、その上から同じような甕をかぶせて埋葬しました。

なお、弥生土器が最初に発見された本郷弥生町の遺跡の所在地については明確な記録が残されていません。当時の考古学の技法が未熟だったためなのでしょうが、現在東京大学の敷地の中に石碑がありますし、本郷二丁目の角にも石碑が建立されています。こういった類のものは先に宣言した方が勝ち、というようなケースが多いようですね。

なお、以前は「縄文式土器」とか「弥生式土器」などのように表現されてきましたが、最近では「式」という文字を使わずに「縄文土器」あるいは「弥生土器」というように表現されている文献が多いようです。

縄文人と弥生人

縄文時代に住んでいた日本人すなわち縄文人は、木の実を拾い、獣を狩り、非常に過酷な生活をしていたということはよく知られています。また、弥生人は稲作をして米を主食として豊かな生活をするようになったということも歴史教科書で習ってきました。では、実際にどのような生活をしてきたのか、もう一度おさらいしてみましょう。

「縄文人」とは、およそ1万数千年前から稲作の水耕栽培が始まる紀元前3世紀頃までの時代に、石器と土器を生活用具として、主として狩猟採集生活していた人たちです。縄文時代の大きな特徴は、人々の間に争いがなく、非常に平和に暮らしていたらしいことですが、この時代の平均的な寿命は25歳～35歳くらいではなかったかと思われています。

「弥生人」とは、紀元前10～5世紀ごろから紀元3世紀ごろの巨大古墳が出現するまでの時代(弥生時代)に、青銅器や鉄器と薄手の土器を使用して、稲作の水耕栽培技術を持った人たちです。ここで「水耕栽培」とことわっているのは、縄文時代晩期にはすでに米(陸稲)を食べていた節があるからです。

全国で発見された貝塚の調査の結果、縄文人はアサリやハマグリ、カキなどの貝類や、アジ、サバ、イワシあるいはマグロやクジラなどの魚類を食べていたようですし、猪や熊、鹿などの動物、カモや白鳥などの鳥類など、私たちが現在食べるほとんどの生き物が食料となっていたことがわかっています。

縄文人は狩猟採集の移動生活だったと教科書には記述されていますが、実際は定住して狩猟採集だけでなく、原始的な農耕栽培がなされていたと思われる痕跡が数多く発見されています。たとえば青森県三内丸山遺跡では大規模な集落跡が発見されており、そこでは栗の生産がなされていたのではないと思われる痕跡が発見されました。縄文人は木の繊維で作った簡単な衣装を纏っていましたが、ヒスイやメノウあるいは水晶などで作られた勾玉(まがたま)や管玉(くだたま)などの装身具をつけており、けっこうおしゃれであったようですし、また、縄文土器に見られるように、美的感覚も豊かであったようでもあります。三内丸山遺跡では、新潟県の糸魚川でしか採れないヒスイの勾玉などの装身具が大量に発見されており、青森と新潟との間でヒスイと栗などとの交易があったのではないかなどと推測されますし、ナイフや矢じりに使われた黒曜石は、産出場所が限られていますが、全国各地で出土しますから、全国的な規模で交易があったものと思われま

昭和23年(1948)、静岡県登呂遺跡では整然と区画された数十枚の水田跡や住居跡、高床式倉庫跡などが発見され、同時に多数の農具が出土したことによって、弥生時代の村落を解明する最初の貴重な資料となりました。また、北九州の遠賀川遺跡から発掘された前期弥生式土器が、瀬戸内海地方から近畿地方、関東地方にと移動する形で年代別に発見されていますから、稲作水耕栽培の技術が九州から関東に伝わっていったことを証明しているのではないかとされています。

この弥生時代には鉄器や青銅器が出現します。ヨーロッパではかなり早い時期から青銅器や鉄器が使われていましたが、日本では鉄器と青銅器が同時期に現れています。そこから、弥生人は稲作技術を持った渡来人ではなかったかという説もあります。ちなみに、日本ではこのころの遺跡から金製品がほとんど発見されていません。

稲の水耕栽培によって生活が安定してくると、人口が増加し、社会の構造が変化していく過程において、「卑弥呼」に代表される多種多様な呪術者や指導者が出現し、縄文時代には見られなかった争いが起こるようになったことは想像に難くありません。佐賀県の吉野ヶ里遺跡では、周囲に掘をめぐらせた環濠聚落や、頭部がなかったり、矢じりが突き刺さったりしたままの人骨が多数発見されて、激しい戦乱を物語っています。これも縄文人には見られなかったことで、渡来した新モンゴロイドによるものではないかという説もあります。

それでは縄文人はどこへ行ったのか。縄文人が自然に変化していったという説もありますが、渡来人と混血して弥生人になったという方が、何となくすっきりと受け容れられます。しかし、縄文人が渡来した弥生人に追い払われたという説も根強くあり、その説によれば北方のアイヌ民族や南方の沖縄人がその子孫だといえます。また極端な説は、南米に渡ったという説があります。その根拠は、エクアドルの遺跡から発掘された縄目模様の陶器があるからだということです。

ある研究者によると、縄文人は目が大きく二重まぶたで、唇が大きく、顎が発達しており、福耳で耳垢が湿っていて、全体に汗っかきであり、その反対が弥生人だそうです。ご自分の顔を鏡で眺めて、どちらの系統か考えて見るのもいいでしょう。ただし、スッピンでおねがいします。見栄を張って化粧して眺めるほどの話ではありませんからね。

(篠井純四郎)